

暑中お見舞い申し上げます！！

7月23日、暦の上では「大暑」。暦の上どころか、毎日が大暑、大暑の日本列島です。皆さん、熱中症には十分気をつけてください。気づかないうちに罹ってしまいます。数年前に熱中症を経験した私は、いまだにその病の中を漂っているよう・・・です。何とかこの夏を乗り切りましょう。



さて、**浜松文芸館の展示室が模様替えしました。今回は、昭和63年4月26日に開館した本館の30年の歴史の歩みを紹介した展示です。**この間、85回の展示や講演会が開催されました。その中から、浜松の文芸10人の先駆者に関わる展示、田村高廣氏や森村誠一氏の講演会、初代名誉館長・木下恵介氏3兄弟にまつわるもの等を、ポスターやチラシ、当時の新聞記事や写真を添えて並べてみ

ました。懐かしいシーンが蘇ってくるかもしれません。

思えば、浜松文芸館30年の歴史は、浜松文芸の30年の歴史とも言えます。浜松を舞台に活躍した文芸人たちが自分の心を言葉に託して作品に紡ぎ上げたものが、浜松の歴史と共に生きてきました。平成の今を生きる私たちは、その作品の数々を目にした時、そこに、決して色あせていない作家たちの「ココロとことば」を感じます。

この浜松市は、政令市の中で「幸せ度第1位」ですが、文化度は15位だそうです。浜松市の文化度を上げるには、市民の皆様の文化へのご理解とご協力が不可欠です。暑さ厳しき折、冷房の効いたクリエート浜松5階へ、是非、足を運んでください。

つれづれなるままに・・・言葉は生きている



先日の「ワールドサッカー」には、サッカー音痴の私も燃えた。選手面々の戦いぶりに熱い声援を送り、確かに「半端ない！」と思ったものだ。この「半端ない」を初めて聞いたとき、正しくは「半端じゃない。半端ではない。」だろう、と真顔で訂正してしまったが、う～ん、気持ちとしては大変よく伝わってくる言い方である。そういえば、「うざい」「きもい」という言葉もそうだ。「うざったい」「気持ち悪い」の略語であろうか。昔、学校現場にいた私は、そんなマイナーな言葉を使うのは好ましくない、と指導した覚えがある。一方で、実によく感情を言い得ていると感心したものだ。今では、「うざい」が「広辞苑」入りしていることを思うと、この「半端ない」も市民権を得る日が来るかもしれない。

私たちは、言葉なくして生活できない。その言葉は、時代と共に変化していく。今時、平安時代や江戸時代の言葉を使って生活する人はいない。私たちは、自分の気持ちを的確に表す言葉、伝えやすい言葉を探し続けているのだ。色々な言葉、表現があっただけである。自分には一つこだわりがある。例えば「れる・られる」の使い方では、決して、「見れる、食べれる」とは言わない。「見られる、食べられる」と言う。「全く、全然」の後には否定や打ち消しを伴う言い方をする。そんなことにこだわらなくて、と言われてしまいそうだが、かなり意識して使っている。とって、先の「半端ない、うざい、きもい」を否定はしない。要は、時と場所と場合に応じた使い方をすればいいのだ。もっと大事なことは、どんどん言葉を使ってコミュニケーションをとることなのだ。今私たちが使っている言葉が、これから先どのように変わっていくのか、楽しみになってきた。

湖郷の詩人清水みのる 13 立教大学からポリドールへ

浜松文芸館講演会講師 和久田雅之

立教大学入学後数々の好記録を達成、キャプテンとしても活躍したみのるだったが、中学時代から関心が深かった文学方面でも詩人佐藤惣之助の知遇を得、私淑するようになり、詩やシナリオを書きだす。シナリオに「苦悩の底から」がある。

佐藤惣之助はみのるより13歳上の明治23（1890）年12月3日、神奈川県川崎の生まれ。少年の頃から、サトウハチローや佐藤愛子の父佐藤紅緑に師事、俳句を学び、18、9歳頃から詩人の千家元鷹や福士幸次郎らと交流、詩作を始める。みのるが浜松中学入学前の大正5（1916）年、処女詩集『正義の兜』を、翌年には『狂える歌』を出版して詩人として認められるようになった。みのると会った頃、惣之助は30代の半ばだった。後年作曲家としても活躍、多くの名曲を世に残している。

代表作に「赤城の子守唄」「緑の地平線」「男の純情」「人生の並木道」「青い背広で」「人生劇場」「湖畔の宿」がある。「赤城の」と「湖畔の」以外は全て古賀政男の作曲である。

大学は落第することなく4年で卒業した。不自由な身体の兄と、医科大学に通っている弟を抱え、故郷で産婆として孤軍奮闘している母をこれ以上苦しめたくなかったのだろう。それから大正6年までの2年間について、みのるは何も語っていない。

昭和6（1931）年、「松竹映画」が大学及び専門学校以上の人を対象に脚本家の募集を行った。みのるは早速応募、見事入社試験にパスすることが出来た。喜んだのも束の間だった。

松竹には、当時第一線の監督、清水宏がいたんです。これが親戚関係にあって母の猛反対にあつたんです。何んせ、母から言わせれば悪名高き清水宏。あんな浮いた世界に行っちゃいかん、宏みたいになるなんて、とんでもないことだなんてね。そんなかんで脚本家の道はどっかへ行っちゃったんだが、清水（宏）さんが、僕がチョクチョク詩を書くのを知ってポリドールに行くキッカケをつくってくれたんです。

2年遅れだが、こうして無事みのるは、親戚の清水監督のおかげでポリドールに入社することが出来た。

清水宏は、明治36（1903）年3月28日生まれ。みのるは9月11日だから、同年だが、学年はみのるの一つ上である。宏は両親が不仲なため磐田郡山香村西渡（現・浜松市北区佐久間町西渡）の母の実家大橋家で生まれ、祖父に育てられた。父は古川鉱業の社員だった。村の小学校に入学したが、途中から父親の住む東京の神明小学校に転校。中学は父の希望で県立浜松中学校に入学、水泳部に所属した。学業を放擲し、賽銭泥棒や芸者遊びに興じていたというが、真偽は不明である。みのるは1年上級にいた宏について何も語っていないので、宏の浜中在籍も怪しいと言わねばならない。